

パターン・ランゲージを活用した授業実践報告  
— パターン・ランゲージを使い、  
リフレクションから各自のルーブリック作りを支援する —

Class practice report using pattern language  
Use thinking tools to help you create your own rubric from reflection

山出 諭（三重県立四日市南高等学校）

## 概要

新教育課程では「主体的に学習に取り組む態度」が観点の中に含まれた。だがその評価をどうするのかは各校ともに手探りである。本稿では上記の観点の伸長と自己評価を促すツールとして、パターン・ランゲージを活用した実践を報告する。パターン・ランゲージの活用は生徒の学習のリフレクション効果を高めるとともに、今後の自身の学習目標を言語化する手助けとなり、学びに対する姿勢を形成していくことが分かった。

キーワード：パターン・ランゲージ, リフレクション, ルーブリック,

## I はじめに

新学習指導要領の総則では「基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力等を育むとともに、主体的に学習に取り組む態度を養い、個性を生かし多様な人々との協働を促す教育の充実に努めること。」とある。これを受けて現場では次年度に向けてシラバスを（１）知識・技能，（２）思考力，判断力，表現力，（３）主体的に学習に取り組む態度という３つの観点に変更して作成している。

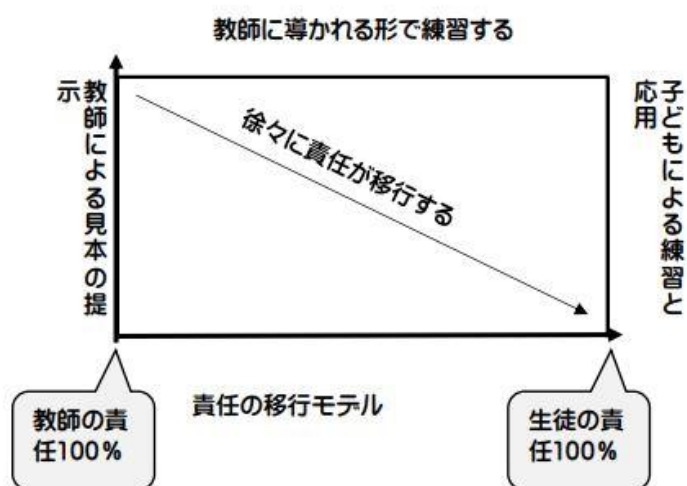
この３つ目の観点「主体的に学習に取り組む態度」については、前の２つと異なり授業で何を行なうのか、行なった上でどう評価するのが課題となる。例えば「では、この単元で学んだことは何でしょうか。書きましょう。」という指示はなかっただろうか。恥ずかしながらこれは 2014 年度頃、AL 型授業に取り組み出した当初の私である。さらに課題となるのは、生徒の主体性を教師が意図的に伸ばそうとする矛盾をはらんだ行為になりかねない点である。

毎回の授業であれ、学期毎であれ、「ふりかえり」の時間をとることが推奨された。だが「めあて」と「ふりかえり」が位置づけられていても、その「ふりかえり」の内容まで我々は指導できているだろうか。ただ上記の矛盾をはらみかねない以上、そこには教授方法の「一斉か個別か」ではなく、それらを含みつつ緩やかに移行するスタイルを模索する必要がある。（図 1 参照）授業時間中に「学んだこと」には言及できても、生徒も教員も学ぶ姿勢や学び方にまで言及することは難しく、それゆえ可視化＝学びをどうつなげるかという視点で書かれたリフレクションペーパーは少なくないだろう。生徒が自分の言葉で表現できるように伴走するにはどうすればよいか。これが私の課題だったといえる。

教科に限らず、校内の「総合的な探究の時間」や課外活動としての「探究活動」を推進する係を担っているが、生徒達はその体験や活動が自分の中で言語化できずに、自身の学びの履歴が活動参加目録（＝カタログ化）となっているのではないか、という危機感も持っていた。

これらの課題意識に対して、学んでいる自分をメタ認知し、リフレクションを支援するツールとして、今回「ラーニング・パターン」というカードを自身の国語の授業へ導入することとした。「ラーニング・パターン<sup>(1)</sup>」(Learning Patterns)とは「どのような状況(context)で、どのような問題(problem)が生じやすく、それをどう解決(solution)すればよいのかという形式で記述されており、それに名前(パターン名)がつけられている。デザイン＝問題発見・解決の秘訣を小さい単位でまとめ、体系立てている点に、パターン・ランゲージの特徴と強みがある<sup>(2)</sup>」。このカードは、よい学び方の知恵や経験則をもとに、パターンの名称が名付けられ、これまで曖昧だった学び方のコツのようなものを言語化・可視化したものといえる。(図1) 今回私はインターネット上で公開されているデータ(pdf)を印刷し、生徒へ配布した。<sup>(3)</sup>

その「ラーニング・パターン」に記載されている文言を各自が活用し、個々のふりかえりの観点をより明瞭にさせることで一足場かけとして機能すること、個別の学習目標が設定しやすくなり、ループリックが作成できるようになることを単元として計画してみた。個人が教員から与えられた学習目標の下で学ぶだけではなく、学期を振り返る中で得られた課題を自らの次の目標へ仕立てていくことで、「主体的に学習に取り組む態度」を伸長させられると考えた。また、これは「個別最適化」した、多様な生徒の多様な学び方の支援となると思われる。



(図1)



(図2)

## II 単元の構想

### 1 単元名

「学期末のリフレクションから来学期のマイループリックを作る」

### 2 対象学年・実践時期

高等学校2年生（2年3組：2021/12/16・17, 2年5組：2021/12/15・17）

### 3 教材

- ・ラーニング・パターン（今回使用したものはPDFをB5で印刷し、裁断したものである。カード1枚はB6サイズとなる。）
- ・ワークシート（図3）

（図3）

### 4 単元の目標

- 1, カードを使いながら、今学期の自身の学ぶ姿勢についてリフレクションできる。
- 2, カードの文言を自分の学びに置き換えつつ、今後の学ぶ姿勢についての目標を立てられる。
- 3, 学び方を説明し合う中で、学ぶ姿勢の新たな一面に気付くことができる。
- 4, 評価規準を設定し、自己評価が可能となるループブックが作れる。

### 5 単元計画（全2時間）

**1時**：KP<sup>(3)</sup>により授業の目標と活動を説明する。2学期の授業内容や学び方をノートを見直ししながら、個々で思い出す時間をとる。その後「ラーニング・パターン」を配布し、カードの内容を流し読みする。その後、ワークシート①～③にもとづいて進める。

①これまでの自分の学び方や学ぶ姿勢について最も近いと感じるカードを1～5枚選び、ワークシートへ書く。

②これからの自分の学び方や学ぶ姿勢について最も近いと感じるカードを1～5枚選び、ワークシートへ書く。

③選んだカードを班の中で説明し合う。具体的な場面を思い出したり、これからの自分がどうありたいか等をペアで説明し合う。このペアワークを通じて、上記①②を再考させ、選び直すことも可能としている。また、カードが選びきれない場合は複数枚を統合し、新たな文言でワークシートに書かせてもいる。

**2時**：「これからの自分」をイメージした上で、選んだカードの文言を使い、3学期以降の学習目

標を立てる。それをもとに、ワークシート内の表（ループリックの枠組み）へ達成の難易を考慮しつつ記述し、自分用のループリック<sup>(4)</sup>を作成させる。今の自分から「何がどれくらい」できたら、A評価を与えてもいいか、明確な規準を含んだ表現にする必要がある。フォーマットが埋まったら、難易度が適切についているか、理想の自分がA評価に表現されているか、見直させる。最後に、ワークシート右下へ2時間分の授業の感想を書かせる。

①ループリックの作成にあたり、教師から以前の授業課題（11月中に全員が経験したもの）を提示し、それをどのような観点と規準を設定して評価していたのかを示すため、生徒へ参考用に教師版のループリック（図4）を配布する。

②教師のループリックを見て、かつての自分の活動を思い出しながら自己評価をつける。その後、「なぜ自分でループリックを作るのか」「ループリックとはどのようなものか」について説明する。伴走者としての教師がいなくても、自走していける学び手となってもらいたいこと、人生における学びの主体者となること、卒業後であっても、一生涯学び続けることの必要性に触れる。

③ラーニング・パターンから3学期以降の目標を立てさせた後、その目標を到達しやすい順にC・B・Aと表へ書かせていく。「できるだけ」や「がんばる」等、自己評価がしづらい表現を明確な規準になるよう、机間巡視をしながら声をかけていく。

2年古典 ループリック				
1	以下の表のいずれかに○をつけること。			月 日 曜日
項目	達成度A	達成度B	達成度C	D
1 課題	訳と品詞分解を発表する前に、以下2点を自分の意志で自ら取り組んだ。①教科書や文法書、辞書などを調べてあった。②発表前には再度自分で説明できるかを練習した。	訳と品詞分解を発表する前に、以下2点の内いずれかを自分の意志で自ら取り組んだ。①教科書や文法書、辞書などを調べてあった。②発表前には再度自分で説明できるかを練習した。	発表直前まで以下の準備をしていなかった。①教科書や文法書、辞書などを調べてあった。②発表前には再度自分で説明できるかを練習した。	
2 計画・実行	品詞分解とその説明（助動詞の意味、敬語など）該当部分の口語訳（単語の訳）の発表中は手元のノートやプリントを見ずに前を見て話せた。	品詞分解とその説明、もしくは口語訳のいずれかの途中で手元のノートやプリントを見て（見ながら）発表した。	品詞分解とその説明も、口語訳もノートやプリントをずっと見ながらの発表であり、前を向けなかった。	
3 協働	相手のお悩みを聞き出し、根拠となる説明ができた。または参考ページや知識を気付かせることができた。	相手のお悩みを聞いたが根拠となる説明は十分にはできなかった。参考ページや知識を資料その他にあり、ともに探してみた。	班員のいずれにも声がかけられなかったが、参考箇所を指で示したり、自作ノートを見せたりはできた。	
感想（班活動で、発表後に、ここまでの改善点や次の課題について）				

（図4）

### Ⅲ 単元の実際

本時の目標と予定を説明した後、ワークシートとラーニング・パターンを配布した。「過去の自分」と「未来の自分」に合うものを選ぶという課題だったが、大半の生徒はカードのタイトルに2学期の学び方の実際を合わせていくスタイルをとっていたようである。話として聞こえてきたのは、「こんなふうに考えながら授業を受けてきていなかった」という声である。

「過去の自分」として選んだカードについては、No, 24「量は質をうむ」（14名） No, 30「ライバルをつくる」（14名） No, 29『はなす』ことでわかる」（12名） No, 27「捨てる勇氣」（12名） No, 25「自分で考える」（11名） No, 11「成長の発見」（11名）が多かった。

これらは、学習時間を増やすこと・ライバルをつくること・他者へ説明することで理解を促進させること・勉強に不必要なものを捨てること・すぐに問題集の解答を見るのではなく、まず自分で考えてみること・日々の自分の成長に自覚的になること等と言い換えられる。

次に「未来の自分」として選んだカードについては、No, 24「量は質をうむ」（14名） No, 32「外国語の普段使い」（12名） No, 30「ライバルをつくる」（11名） No, 38「断固たる決意」（11名） No, 20「広がり掘り下げのT字」（10名） No, 21「隠れた関係性から学ぶ」（10名） No, 25「自分で考える」（10

名)等が多かった。

さきほどとの違いは、「外国語」への意識である。私の実践授業は「古典 B」であったが、生徒達は文系クラスであり、取り組み直前に彼らは 10 月模試の結果を返却されていたり、成績評定の直前（通知表を手渡される前）であったことから、特に「英語」の学力不足を念頭に置いていたものと推測される。このカードには「常日頃から外国語での読み書き、発表のチャンスに身をさらす」とあり、日常的な慣れから特別感を無くしていこうと考えたのではないだろうか。

同様に No, 38 もカードには「やりぬく覚悟を決め、それが実現できるように身のまわりの環境を調える」とあり、また先ほどの No, 32 カードとの相関でもこのカードが示されている。高 2 の冬という時期も関係していると思われるが、「英語」を継続的に使うことへの決意表明と受け取りたい。もちろん、上記の話は「古典」に置き換えて、今後の一層の取り組みを決意している生徒もいたであろうが、私は少なくとも「古文」に関しては外国語として見るのではなく、現代の日本語と地続きで見てもらいたいと語っていたので、少数だと考えるのである。

No, 20「広がり掘り下げの T 字」と No, 21「隠れた関係性から学ぶ」は、生徒の学ぶことに対する意識が拡張されていると受け止めたい。興味・関心がないものにも目を向け、既に興味・関心があるものはさらに深めていく。また、広がり俯瞰して見ていくなかで、その背後にある関係性を考えてみることで、意外な組み合わせや新たな発想が生み出される機会となる。昨年では気付かなかった教科を越えた知識の関係性に気付き始めている、もしくは関係があるかもしれないと考えながら物事を深く見る目を養いつつあるのかもしれない。

志望校の選択が迫られる中で、この広がり深さ、関係づけの思考が活かされるに違いない。たとえ生徒が忘れかけていても、このワークシートが「目標」(図 5)と「ループリック」を兼ねていることで、3 学期以降もたびたび意識化できるはずである。つまり、進路指導に関して、生徒と教師に共通の言語(ランゲージ)が持てているのである。

4) 上記の「タイトル」を使い、目標を書く。		カード N	
捨てる勇気を持ち、新しい勉強法を見つける。			
多様な見方が隠れた関係性を見つけ、学びを楽しくする。			
将来について考える。			
成規準とみなして、達成しやすくなるよう A B C (難→易) の順で書き分けていく。C: 100% 到達できる難易度!			
No.	達成度 A	達成度 B	達成度 C
	ノートまとめの時間を減らし、	平日、土日にノートまとめし、	現行維持。

(図 5：箇条書きで 3 点挙げている。)

最後に「過去の自分」と「未来の自分」とがそれぞれ選んだカードの差について、増え方が最も大きかったものを見ていきたい。

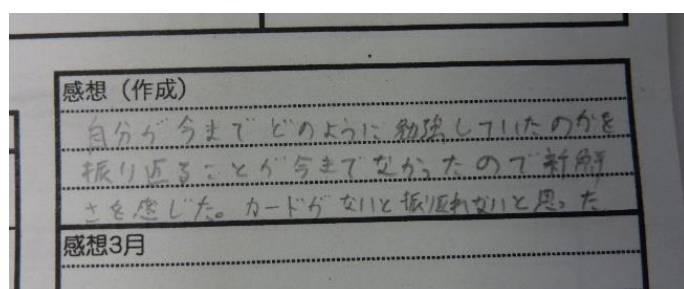
No, 32「外国語の普段使い」(+10) No, 38「断固たる決意」(+8) No, 34「魅せる力」(+7) No, 39「突き抜ける」(+5) No, 23「鳥の眼と虫の眼」(+5) であった。

この中で上記 2 つは先ほど考察したが、興味深い増え方をしたのが No, 34「魅せる力」である。「過去の自分」では 0 名だったものが、「未来の自分」では 7 名と増えた。簡単にカードの説明をすると、



「伝えたい内容を理解してもらっただけでなく、その魅力を感じてもらえる伝え方をこころがける」とあり、魅力の本質的な部分の理解と、アウトプットの方法に関わるものと分かる。生徒の記述には「自分」や「大学で学びたいこと」をいかに魅力的に語ることができるかが書かれており、総合型選抜における面接が想定されていると思われた。1学期末にもリフレクションシートは書かせていたが、これほど多岐にわたる記述は見られなかった。

上記以外でも、パターン・ランゲージが学び方を拡張させ、カードに書かれた「状況」「問題」「解決」が生徒の目標作成を支援するツールとなっていることが分かった。さらに「カードを選んだ自分」が自己の行為をデザインするとともに、カードに導かれるようにして振り返り、メタ認知を行なっていた。



(図6注:私の授業では定期考査の後にリフレクションを1コマで実施しているにも関わらず、今回の活動に「新鮮さ」を覚えている。複雑な心境である。また、その次に「カードがないと振り返れないと思った」と書いている。)

#### IV おわりに

(1) 今回、カードから目標を立てさせていくときに、「授業場面に限らず」と指示していた。そのため、3学期の授業でも利用するとしながら、生徒の目標設定で部活動に関わるものが散見された。教科の授業内でやるのだから、あくまでも教科内での活用限定した上で作成させた方が良かったかもしれない。私としては、「学ぶ」場面を学校生活の様々な場面で描いて欲しかったのと、それらを相互作用的に、ホリスティックにつなげていくことをイメージとしてもっていたため、上記のような対象が広くなり過ぎる指示を出してしまった。それゆえ、今回の試みは観点別評価や評定にはなじまず、個人内評価として見取る(とどめる)べきものといえるかもしれない。今後は、目の前の生徒から「目標」と「指導」「評価」を一体的に構想すること、その中でこのパターン・ランゲージを位置づけることを課題としたい。

(2) 以下(図7)は2021年12月、授業の最後にとったアンケートの結果の一部である。「質問8」は「授業でのふりかえりを次へいかしているか」という質問だが、4月からここまで(12月)では、まだ拙稿の冒頭で書いた「やっただけリフレクション」になってしまっていることが明らかとなった。

質問8	3組	5組
かなり当てはまる	1	5
ほぼ当てはまる	18	17
あまり当てはまらない	13	14
ほとんど当てはまらない	1	1

(図7)

と同時に、今回のこのパターン・ランゲージを用いたループリックの作成が、学習者に一定のふりかえる言葉を持たせたことは確かである。もちろん、「作ったから振り返る」と考えていたのでは、さきほどのアンケート結果を繰り返すことになるであろう。大事なことは、教員が示したループリックに盲目的に追従し、評価される存在になるのではなく、自らの学習過程をメタ的に振り返りつつ、自分事として受け止め、次に活かす姿勢である。あっという間に卒業する生徒達である。新学習指導要領や教育基本法等が示す未来は一あえて私なりに言えば一真善美のもとで、どんな社会を創っていくかだと受け止めている。与えられるのを待ち、ただ享受するだけの社会ではない。

彼らをそのように導き、伴走していくことが役割だと意識しつつ、今回の一連の実践を全体の計画や授業デザイン、評定の中へどのように組み込むことが効果的であるのかを考えながら、引き続き毎日の授業を考え続けていきたいと思う。

## 参考文献

(1) 井庭崇『パターン・ランゲージ：創造的な未来をつくるための言語』（井庭崇 編著，中埜博，江渡浩一郎，中西泰人，竹中平蔵，羽生田栄一，慶應義塾大学出版会，2013 年）

他にも、HPからPDFで読めるものとして、「創造的な対話のメディアとしてのパターン・ランゲージ：ラーニング・パターンを事例として」（KEIO SFC JOURNAL, Vol. 14 No. 1, pp. 82-106, 2014 年）などがある。2021/11/30 確認

(2) クリエイティブシフトのホームページ

(<https://creativeshift.co.jp/pattern-lang/>) 2021/12/22 確認

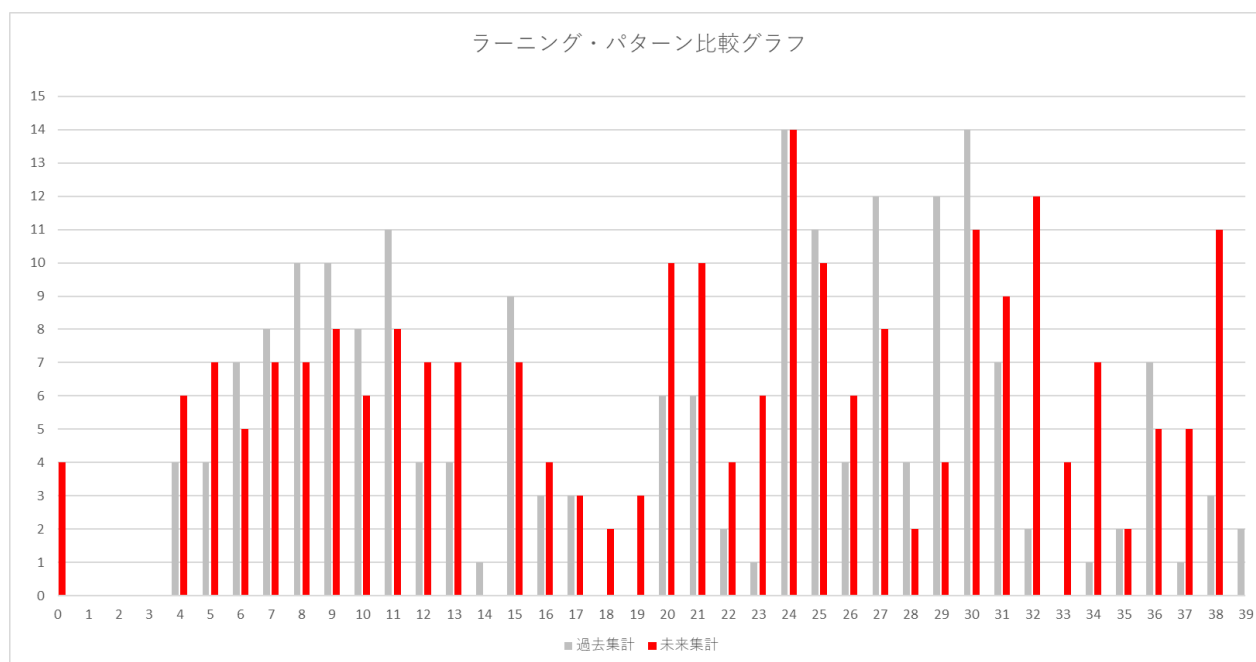
(3) 川嶋直『KP 法 シンプルに伝える紙芝居プレゼンテーション』（みくに出版，2013 年）

(4) ダネル スティーブンス(著)，アントニア レビ(著)，佐藤浩章(訳)，井上敏憲(訳)，俣野秀典(訳)『大学教員のためのループリック評価入門（高等教育シリーズ）』（玉川大学出版，2014 年）

(図1) ダグラス・フィッシャー&ナンシー・フレイ(著)，吉田新一郎(訳)『「学びの責任」は誰にあるか』（新評論，2017 年）

(図2) <https://learningpatterns.sfc.keio.ac.jp/download.html> 2021/12/22 確認

## 【補足資料】



カード No	過去集計	未来集計	差	選択合計	カードのタイトル
0	0	4	4	4	学びのデザイン
1	0	0	0	0	SFCマインドをつかむ
2	0	0	0	0	研究プロジェクト中心
3	0	0	0	0	SFCをつくる
4	4	6	2	10	学びの竜巻
5	4	7	3	11	知のワクワク
6	7	5	▲ 2	12	研究への情熱
7	8	7	▲ 1	15	まずはつかる
8	10	7	▲ 3	17	「まねぶ」ことから
9	10	8	▲ 2	18	教わり上手になる
10	8	6	▲ 2	14	身体で覚える
11	11	8	▲ 3	19	成長の発見
12	4	7	3	11	言語のシャワー
13	4	7	3	11	アウトプットから始まる学び
14	1	0	▲ 1	1	プロトタイピング
15	9	7	▲ 2	16	学びのなかの遊び
16	3	4	1	7	動きのなかで考える
17	3	3	0	6	フィールドに飛び込む
18	0	2	2	2	偶発的な出会い
19	0	3	3	3	フロンティアアンテナ
20	6	10	4	16	広がりと掘り下げの「T字」

21	6	10	4	16	隠れた関係性から学ぶ
22	2	4	2	6	右脳と左脳のスイッチ
<u>23</u>	1	6	5	7	鳥の眼と虫の眼
<u>24</u>	14	14	0	28	量は質を生む
<u>25</u>	11	10	▲ 1	21	自分で考える
26	4	6	2	10	目的へのアプローチ
<u>27</u>	12	8	▲ 4	20	捨てる勇氣
28	4	2	▲ 2	6	学びの共同体をつくる
29	12	4	▲ 8	16	「はなす」ことでわかる
<u>30</u>	14	11	▲ 3	25	ライバルをつくる
31	7	9	2	16	教えることによる学び
<u>32</u>	2	12	10	14	外国語の普段使い
33	0	4	4	4	小さく生んで大きく育てる
<u>34</u>	0	7	7	7	魅せる力
35	2	2	0	4	「書き上げた」は道半ば
36	7	5	▲ 2	12	ゴール前のアクセル
37	1	5	4	6	セルフプロデュース
<u>38</u>	3	11	8	14	断固たる決意
<u>39</u>	2	7	5	9	突き抜ける

\* 差は「未来集計」－「過去集計」で算出している。特に増加・減少の大きかったベスト3(4)に網掛けしている。

\* 選択合計は「未来集計」＋「過去主計」で算出している。差にこだわらず2回の合計で多かったベスト4に網掛けしている。

\* カード No. で網掛け、アンダーラインを施しているのは上記2点で目立つものである。